

令和5年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



高等学校の部 最優秀賞

「真の国際交流」の在り方 -原爆投下を通して考える-

福島県立原町高等学校

1年 鈴木 桜子

原爆開発に関わった学者を描く映画「オッペンハイマー」と映画「バービー」が先日アメリカで同時公開された。SNSではバービーの髪型をきこの雲に加工した画像が投稿され、騒動になっているという。

私がこの騒動を知ったのは、原爆投下から78年になる数日前であった。8月6日に広島、9日に長崎に壊滅的な被害をもたらした原爆。広島・長崎を合わせて約21万人が亡くなった。ただし現在でも、原爆によって死亡した人の数は正確には分かっていない。「原爆の子」は、被爆した広島の子供たちの体験記がまとめられた本であり、世界各国で翻訳された。被爆当時4歳だった子供の文章までもあまりにリアルすぎて、目の中に針が刺さるような光やひどいやけどを負った人の姿、水欲しさに狂ったように彷徨う人々など、その恐ろしい情景が目の前に見えた気がした。

私はこれまで、学校の授業や探究活動で原爆について学ぶ機会が多くあった。歴史の教科書には原爆投下時の白黒写真が掲載され、道徳の授業では原爆をテーマとした教材を学んだこともある。メディアでは原爆投下時の映像が流れたり、特集番組が組まれたりする。また原爆が投下された日には、毎年日本各地でサイレンが鳴り響き、人々は亡くなった方へ黙祷する。日本では幼い頃から原爆投下について教育を受ける。原爆投下の事実は、日本人であれば誰もが学ぶことであろう。

この夏、私にとって初めての経験があった。我が家はホストファミリーとして、アメリカの17歳の高校生を受け入れた。彼女とは約2週間を共に過ごし、国境を越えたよき友達となった。会話を通して互いの文化や価値観の違いを肌で感じる事ができた。違いがあっても一緒に笑ったり楽しんだりできたことは本当に素敵な思い出となった。そんな彼女と過ごす中で、ふと原爆のことが頭をよぎった。アメリカ人の彼女は原爆についてどう考えているのか、知りたいと思った。しかし直接聞くことはできなかった。せつかく築いた関係性が壊れるのを恐れたからだ。私は帰国した彼女に連絡を取ることにした。私からいくつか質問をし、それに答えてもらった。彼女は広島と長崎の爆撃について聞いたことはあると言った。しかし原爆が投下された日にメディアで報道されることはなく、学校では日本の真珠湾攻撃についてのみ学ぶ。原爆については全く教えられないというのだ。日本が苦しんだことは決して教えられない。私自身これまで何度も原爆のことを学ぶ機会があったので、アメリカでも当然原爆について教育が行われていると思い込んでいた。アメリカ人も日本が原爆によって受けた被害の悲惨さを学んでいると思っていた。しかし現実異なることを初

めて知り、大きな衝撃を受けた。NHKが2020年に日米の若い世代を対象に行ったアンケート調査の結果からは、アメリカ人の約7割が核兵器は必要ないと考えていることが分かった。彼女も、原爆投下はアメリカがあまりにも厳しく反応しすぎた結果だと言った。以前、アメリカは原爆投下を戦争終結のためには仕方がなかったとして正当化していると聞いたことがあるが、この調査の結果から、彼女に限らず若者を中心に認識が変わってきていると言ってよいだろう。また同年にNHK広島放送局が広島県、広島県以外の全国、そしてアメリカの18歳から34歳を対象に行ったインターネット調査では、原爆についてもっと知りたいと回答した人は広島県で76.5%、広島県以外の全国で68.7%、アメリカで80.5%となり、日本人より高い割合となった。数字を見れば、近年原爆投下に関心を持つアメリカ人が増えていることは事実である。しかし根本的な要因としては、日本とアメリカの教育の違いが大きく影響していると考えられる。原爆投下は既に過去のものと捉えるアメリカに対し、被害を受けた日本ではいまだに続いているものである。両国の原爆投下という1つの事実への捉え方の違いが、教育の違いを生み出しているのだろう。これがアメリカ人の原爆への関心にもつながっていると考える。冒頭に挙げた映画の事例は、両国の教育が生み出した意識の差によるものだと言えよう。実際に街中で記者から加工された画像を見せられたアメリカ人の女性は大笑いして、記者が事情を説明すると少し深刻そうな顔になった。ここにも原爆の捉え方の違いが浮き彫りになっている。

元大統領バラク・オバマ氏は2016年5月27日にアメリカの現職大統領として初めて広島を訪問した。彼はスピーチで、原爆が日本にもたらしたあまりにも悲惨な被害と核の残虐さを訴えたのだ。

私が住む東北地方では2011年3月に東日本大震災が発生し、多くの人たちが多大なる苦しみを味わった。数年前、福島で被害を受けた人たちが広島を訪れ、被爆者の方と交流した。そこで被爆者の方が語った言葉は、「私たちは核兵器を作ることも持つこともやめてほしいと訴えてきましたが、なかなかその声の世界の隅々まで届かない——でも、諦めないで、執念深く、何度でも何度でも、叫び続けていきましょう。」というものであった。福島も広島も、過去の傷跡を決して消し去ることなく伝え続けていく必要があるという点は共通していると言えるだろう。

私はこの夏アメリカ人の高校生と出会い、国境を越えた交流を身をもって体験したことで、私の中での国際交流の在り方が確立されたように思う。「自国の過去を諦めずに伝え続ける努力をすること、他国の過去を知ろうとする姿勢を持つこと。」これこそが「真の国際交流」と言えるのではないか。そうは言っても、決して簡単に実現できるわけではないことなど言うまでもないだろう。しかし、不可能だと言っているのはいつまでも真の国際交流には辿り着かない。私の考えに基づけば、ただ単に国家間で友好的な関係を築くことは真の国際交流とは言えない。前述した2つの要素を達成して初めて真の国際交流が実現されると考える。そしてそれができる人のことを「真の国際人」と呼ぶべきだろう。私が彼女に原爆について直接聞き出せなかったことは、真の国際人はしない行為であった。今回私が考えた原爆による被爆者の高齢化は著しく、後世に事実を語り継いでいくことができるか心配されている。過去を次の世代につなげる努力をすることは、辛い思いをした人々がいたことを忘れないために、過去の過ちを二度と繰り返さないために必要不可欠である。そしてますますグローバル化が進む国際社会においては、各国がそれぞれの多様な背景と共に歩んでいかなければならない。これらのことから、私達には世界中に原爆投下の事実を伝え続けるために努力する義務があると言える。これは地道な作業の繰り返しでしか実現されないのだ。私は「真の国際交流」ができる「真の国際人」でありたい。

参考文献

「原爆の子ー広島の子のうったえー（上）」長田新 岩波文庫

NHK 政治マガジン <https://www.nhk.or.jp/politics/articles/statement/42800.html>

外務省 HP 「オバマ米国大統領の広島訪問（概要と評価）」

https://www.mofa.go.jp/mofaj/na/na1/us/page4_002105.html

80歳を過ぎて語り始めた被爆体験 <https://d4p.world/news/19350/>